時流を読む

〝縁農〟で〝楽農〟を広げる

農的社会デザイン研究所 代表 蔦谷 栄一

援農で成り立つ産地

山梨市牧丘町に筆者が自ら竹藪を開墾して拓いた1反歩ほどの畑があって、週末は東京から畑仕事に通う。ぶどう・巨峰の全国でも屈指の産地だ。

牧丘町も担い手の高齢化が顕著で、このため援農を取り入れているところは多い。親戚縁者の力を仰ぐもの、個人的な交友関係によるもの、大学等と契約をしての援農、観光農園に援農を組み入れているもの等、その形態は多様である。活気が感じられるぶどう畑は援農を少なからず導入しているというのがその共通項でもある。

援農の必要性、重要性は当地、また果樹に限らず、全国そしてすべての農産物に該当する。

人手のありがたさ

11月下旬、長野県伊那市高遠町でりんごの収穫を手伝った。家内の実家での話となるが、95歳の母親が健在であることから毎月1回は顔を出すことにしている。それがちょうど「ふじ」の収穫時期と重なったことでの手伝いだ。

この日の収穫作業は、私ともう1人の親戚に、東京から日帰りで駆け付けた老若男女12人が加わり、大人数での収穫となった。

さほど大きなりんご園でもないが、園主である家内の弟1人では何日も要する作業が、午前中でおおむね完了。まさに人手があることのありがたさを実感させられた。

20年以上の援農

東京からの12人は3台の車に分乗。運転手は5時過ぎに自宅を出発して途中で仲間を拾い、中央高速道の渋滞を乗り越えて9時前に現地に到着。それから作業に入って、昼までには収穫を終了。実家に戻ってこの日のために用意した松茸ご飯をはじめとする心づくしの料理で昼食。少し休憩して、渋滞がひどくならない前に、ということで東京に向かって出発。

彼らは20年以上もここに援農にきてくれているそうで、中には高校生も混じるが、彼は赤ちゃんの時、物心つく前から通っているとか。まさに勝手知ったる〝自分の田舎〟になっているようだ。

合唱の仲間たちが援農

援農に駆けつけた人たちは三多摩青年合唱団のメンバーとのこと。家内の弟は合唱が趣味で、いくつかの合唱団で歌をうたったり指揮をしたりしており、嫁はピアニストで伴奏をつとめる。夫婦して合唱活動に熱心で、各地の合唱団との合同演奏等の交流も頻繁だ。そうした活動の中で、三多摩青年合唱団と出会い、そのご縁で援農にきてもらっているもので、援農にとどまらずずいぶんと購入もしてもらっているらしい。

趣味がもたらす交友関係

趣味の世界でのつながりが援農を導いており、〝縁農〟というにふさわしい。まさに〝芸は身を助く〟ということでもある。農家も趣味と多様な交友関係を生かし、一方で援農を楽しんでもらうことが、農業経営を可能にし、お互いのエネルギーをかきたて活性化をもたらす。〝楽農〟の時代でもある。